第２グループ（少子・高齢化）

まえがき

千里ニュータウンが活性化を失った最大の原因は「少子・高齢化」にあります。

千里ニュータウンで最初の入居が始まったのは今から４０年前（昭和３７年）佐竹台でのことです。以後年々人口は増加しましたが、昭和５０年の１２万９千人（豊中市を含む）をピークに減少に転じ、平成１３年末では９万５千人を割り込んでいる状態です。

しかも、高齢化率は大阪府平均をはるかに上回り、独居老人の数は鰻登りに増えました。反対に、１４歳以下の若年層の割合は平均値より大きく低下しています。更に、千里ニュータウンオープン当初６２％を占めていた夫婦と未婚の子どもの世帯は、今では３０％を切っています。

千里ニュータウン発足当初考えられていた理想的な街の構造は、高度成長による住民の価値観の変化によって、いやおうなしに変貌させられました。核家族化、三世代同居家庭の減少、若者の千里ニュータウン離れ、そして加速される少子・高齢化問題でした。

これは我が国の一般的な風潮であったとはいえ、歴史の浅い千里ニュータウンではその影響が様々な形で波及して行きました。従って、少子・高齢化問題の解決抜きに、千里ニュータウンの再生を考えることはできません。

しかし、理想の住都「千里」をステータスと考え、誇りをもって住まいとしてきた私たちにとって、時代の変化によって千里がどのように活性化を失おうとも、この街に対する愛着と誇りを捨て去ることはできません。

だから、私たちは心から願っているのです。日本で最初の価値あるニュータウン千里は、少子・高齢化対策でも、日本で最高のノウハウを兼ね備えた理想の街でなければならないということを……。しかも、そうした情報を全国へ発信する、かけがえのない基地でなければならないということを……。

それは、「少子・高齢化」をマイナス要因としてのみ捉えるのではなく、少子であり高齢化であればこそ、他の街に類を見ない住民本位の、暖かみのある、それでいて活気のある街を、創り出すことにはほかなりません。

高齢者が生き甲斐を感じて住める街、若い夫婦が安心して子育てのできる街、それはまた、あらゆる年代層、あらゆる分野の人たちにも夢と希望と満足感を与えるものでなければなりません。

２１世紀、人が千里に住みたくなる要素は何か、もう一度根底から洗い直すことです。

Ⅰ．高齢者のために

１．高齢者の生き甲斐づくり

（１）高齢者の能力を活用するプランと場の作成

高齢者が生き甲斐を持てる仕事やボランティアを提供し、積極的に参加を促します。例えば、ＩＴ関連などの経験者が集まって、そこから新しい仕事を創出して行きます。

（２）「される側」から「する側」に

①高齢者も住民の一人として「世話をする側」に参加してもらいます。

②独居高齢者の昼食会や配食サービスなどで、従来の「される側」から「する側」に立場を替えて、高齢者に生き甲斐を見出してもらいます。

２．独居高齢者への働きかけ

① 社会に背を向け、近隣と隔絶する高齢者（特に男性）に、目を外へ向けるよう働きかけ、地域社会との係わりを理解してもらうよう努力します。

② 趣味や娯楽の仲間に誘いだし、生き甲斐を見つけ出していただきます。

③ 独居高齢者の情報の把握と交流を図り、孤独死を防ぐ手立てとします。

３．高齢者の知恵の活用

① 子どもたちと遊びを通して知恵の交流を図ります。核家族化した子どもたちには基本的な生活の知恵が欠けています。例えば鉛筆を正しく持てない。ナイフで鉛筆を削れない。靴の紐を結べない。卵が割れない。タオルが絞れない。箸が持てない。これでは日本特有の文化が壊滅します。今こそ高齢者の経験と知恵が必要なときです。

② 子どもたちに古くから日本に伝わる遊びを教えます。昔の子どもは遊びを作る名人であり、創意工夫がありました。今は与えられたものでしか遊べません。知恵不足を補うのは高齢者の義務です。

③ 社会生活の常識や公徳心を教えます。今ほど、他人への思いやりや、他人の痛みを自分の痛みと感じる心に欠ける時代はありません。善悪のけじめがない。感謝の心がない。正義感がない。全て家庭内でのしつけ不足からくるモラルの低下が原因です。

日本の将来を見据えて、高齢者の経験と心が子どもたちを甦らせるのです。

④ 今は親が子どもを教えたり叱ったりできない時代です。その欠点を埋めるのが高齢者の務めです。町内の子どもを親以外の他人が、みんなで叱ったり導いたりしながら育成する、コミュニケーション作りが何よりも大切。高齢者の出番は多いと思います。

Ⅱ．少子化について

１．未来に希望がもてる環境づくり

核家族化が進んだ時代を子どもとして歩んできた現在の子育て世代は、その時代の経済、社会全体の成長に後押しされ、住環境（マイホーム、子ども部屋）

や教育（習い事、学習塾）や遊び（マスメディアの普及、多種多彩のおもちゃ）等の面で、「ものの豊かさの中で育ってきた世代」です。

現在は、社会全体の状況が厳しく将来へ大きな課題（つけ）を認識せざるを得ない時代となり、その中で、「将来を託さなければならない子どもたちを産み育てていかなければならない」ことは、「結婚や子育てに夢をもてるだろうか？」と不安にならざるを得ないのではないでしょうか。「もの」の時代から「情報」の時代へ社会は変わり、現在の子育て世代は、比較的「情報」を吸収しやすい世代です。その反面、「情報」の氾濫によって振りまわされ、不安を増大させ孤立していないでしょうか。また、親の不安が子どもの成長に良くない影響を及ぼしていないでしょうか。

① 子育てに関する様々な情報を交換でき、他人と一緒に考えることができる人間形成を養う環境をつくります。
- 情報を整理し、情報だけの固定観念をなくすこと。
- 子育て世代のグループ間交流を増やし、様々なグループが共有できる情報交換の場（インターネットの仮想広場や井戸端会議的な集会所等）を設けること。
- 協調性を基本とした社会マナー的なルールをつくること。

② 「仕事と子育て」、「家事と子育て」、「余暇と子育て」等における心の豊かさをもてるように、サービス、支援策、施設等の環境を整備、充実させます。
- 子育てに関して、父親、母親の区別（役割分担）をなくしていくこと。
- 子育て支援活動に地域通貨制度を導入すること。
- 非営利活動への企業の積極的な参加を促すこと。
- 行政管理の施設を利用した子育て支援を提供する拠点をつくること。
- 子育て支援活動に対する行政施策（教育、児童福祉等）の充実を働きかけること。

③ 安心して子どもたちが集え、子ども同士で縦の関係が形成できる環境を整備します。
- 子ども会の活性化と更なる発展を促すこと。
- 遊び場としての学校運動場の利便性を増すこと。

２．世代を超えた交流

教育機関をはじめ様々な諸団体において、高齢者と子どもたちとの交流が催されています。しかし、親世代と祖父母世代との交流は少なく、祖父母から両親への生活ノウハウの引き継ぎは少なくなっています。それぞれが、「時代遅れ」、「現代には合わない」、「昔は良かった」など、個人意識や価値観の相違で人間関係をぎくしゃくさせていないでしょうか。そして、無関心さによって活性力を失ってきたのではないでしょうか。

① 誤解や思い込みを、交流することにより無くしていきましょう。

② 世代間意識（価値観）の相違を理解し合える人間関係を形成していきまし

ょう。

③　子育ては「経験を活かす」ことが大切であり、一人で抱え込んでしまうものではありません。そのノウハウをもっている人生の先輩方に積極的に教えていただきましょう。

④　情報化時代のノウハウを高齢者に教えていきましょう。

・ 高齢者の関連団体と子育て世代のグループとが、相互に情報をやりとりできる「世代間交流会」を行事化すること。

３．住民の意識改革

少子化の進行は、高齢化率を加速させることになります。また、将来、自分自身も高齢者の仲間入りをすることになり、その時代を担うのは現在の子どもたちです。千里ニュータウンの活性力が低下してきた課題を先送りしないように、子どもたちだけにその解決を担わせないためにも、「千里ニュータウン」は「希望をもって子育てができる街」、「子どもたちが活き活き育つ街」にしましょう。

①　住民一人一人に問題意識（危機感）をもってもらい、「自ら解決し、これからの千里ニュータウンの中心的世代は我々だ」という意識のもと、積極的に協働しましょう。

②　地域には自治会関連、教育関連、商店街関連、福祉関連等、様々な団体が活動しており、Ⅱ－１，２の環境づくりや交流が実践されています。それらを活用できるような新しいリーダーの育成が強く望まれます。

・ サービスを受けるだけでなく、自ら解決していく意識をもたせる活動を行うこと。

・ 地域の各種団体が交流できる組織、ネットワークをつくること。

Ⅲ．少子・高齢化の中で施設や設備はどうあるべきか

１．遊休施設の開放と活用

（１）学校の空き教室の有効活用

これだけ少子化が浸透すれば、一校区当りの児童数が減少し、千里ニュータウン内の各校とも空き教室が増加しています。その空き教室を使って、Ⅰ－３－③に記述した高齢者と子どもの「知恵と遊びの教室」や「躾教室」を開きます。高齢者の生き甲斐は高まり、子どもたちに欠けているものは充足されます。ところが、学校現場では空き教室を物置に使いながら、空いている教室は一切ないといいます。将来の小人数学級への移行に備えて、開放しないという行政側の差し金が働いているとすれば、一考が必要です。

（２）近隣センターの空き店舗利用

各地区の近隣センターは時代の流れとともに取り残され、活性化を失い、歯の抜けたように空き店舗が目立ちます。この空き店舗を行政が借り受け、地域のサポートセンターとして活用します。今、高齢者や若夫婦が最も望んでいる施設は、気軽に集い語れる喫茶室兼情報交換の場です。高齢者にとっ

ては友人知人の増加に、若い親にとっては子育て支援や育児相談に、安心して集える場所として是非活用したいものです。

また、ミニディサービスや配食サービス、託児所や児童館的な施設としても利用できます。これらは近隣センターの活性化にもつながるはずです。

２．新しいコミュニティーサービス

（１）配食サービスの事業化

今、高齢者向けの配食サービスは受給希望者が多すぎてパンク状態にあります。これからのこうしたサービスは、単にボランティアに頼るのでなく、事業化による安定的なサービスを考える必要があります。そのためには台風や災害時にも機能する厨房施設を整え対処することが肝要です。

（２）子育てサポートセンター

コミュニティーサービスの一環として子育てサポートセンターをつくり、若い親に子育てのノウハウを提供し、虐待等の原因とも言われるストレス解消の手助けや相談を受けることが求められています。

（３）児童館又は児童館的施設の新設

千里ニュータウンに少ないものに児童館があります。子どもたちの健全な育成にはせめて各小学校区に一つの児童館が必要ですが、それが無理なら児童館的なものを他の施設に併設することです。

（４）高齢者向けの福祉食堂

配食を受ける資格もなく、どうにか歩けても食事を作れない人のために、老人向けの安くてゆったりした福祉食堂をつくります。世間話を交わしながら、人と人との触れ合いを楽しむ場所づくりが、生き甲斐を生み出すもとになります。

これらの施設はいずれも住区の中心にある近隣センターか市民ホールの一部を活用することが望まれます。

３．千里ニュータウンにふさわしい未来型の住居

（１）広くて住みやすい三世代住宅

２１世紀、今後ますます少子・高齢化が進み、人口の減少が予想される以上、三世代の家族がプライバシーを守りながら同居できる、ある程度広さのある住宅が不可欠です。

（２）高齢者に優しい高層住宅

医療設備が整っていて、リハビリや高齢者ケアができ、配食サービスなども兼備した、高齢者や障害者に優しい高層集合住宅の建設や現在の公的集合住宅の改造が必要です。

（３）若年世代のための住居

若年世代夫婦の入居を促進するため、安価な賃貸住宅を増やします。

安心して出産育児ができるよう生活費の低廉化を行政が積極的にサポートすることが大切です。

（４）公営住宅のペア入居

両親の近くの住棟に子ども家族を割安で入居できるよう目指します。

Ⅳ．少子・高齢化対策を進めるための人材育成について

１．既存の組織と新しく求められる人材

（１）地域の組織役員の高齢化

人材は、どんどん入れ替わっていく必要があります。それでなくては、魅力ある街を構築できません。自発的にやる気のある方達が、多くのグループを発足していくことが望ましいと思われます。そこでは、人間関係をスムーズにすることができるような、リーダー的な役割がはたせる人材が必要になってきます。また、多くの情報を身に付けることは不可能に近いため、リーダーがパソコンなどの情報機器を使えることが必要です。

２．新しい活躍の分野

（１）近隣センター

近隣センターの空き店舗利用のなかで、多目的なコミュニティサービスを提供できる場所と、そこで活躍して頂く、経験豊富な女性が求められるでしょう。若者の育児相談から、高齢者のサポート相談、いろいろな住民の諸問題まで、相談できる人材が必要です。

（２）高齢者

各住区にたくさんの配食ボランティアの人材が必要になってきます。

リーダーは常に新鮮な感性を持続するためにも、専門的な学習を年一回は受講できるシステムを創ってはいかがでしょうか。

（３）若者にも魅力的なまちづくり

高齢者にもインターネットを普及させ、情報のやり取りで、バーチャルな世界と顔の見える現実の世界とを頻繁に行き来でき、体験できる楽しいまちづくりが大切です。そうすれば、若者との交流が進み、若者が住みたくなり、自分達のまちという意識が芽生え、魅力あるまちになるでしょう。人材も集まります。魅力的なまちに生まれ変わることでしょう。

（４）子育て支援

地域サポートセンターの充実。子育てアドバイザーと施設が必要です。

高齢者と子どもの「知恵と遊びの教室」や「躾教室」を開くための、人材の発掘とリスト作成。

（５）時代に即応した図書館の充実

時代の変化に応じた書籍をおき、図書館自体を充実させる必要があります。

小中学校の図書館には、司書の資格をもった高齢者をボランティア的に配置してはいかがでしょう。

（６）健康管理のために

予防医学の面から、高齢者は、全員が何らかのかたちで、運動をする機会がもてるようなシステムがあればよいと思われます。

そのためには、運動と学習とをセットで教えられる経験豊富なアドバイザーが必要です。

３．人材育成をどのように取り組めば良いか

従来から取り組んでこられた、自治会、各種団体などのベテランのリーダーは、この４０周年を機に、現状の諸問題は継続しながらも新しい人材を育てる側に立って考えてほしいものです。大変なご苦労をかけますが、課題を未来への期待に込めて、協力をよろしくお願いします。